



RYOKO FUKASAWA
PIANO RECITAL

深沢亮子ピアノリサイタル

2008年5月22日(木) 7時 紀尾井ホール

マネジメント: **Shin En** 新演奏家協会 03-3561-5012



本日はお忙しい御中、私のリサイタルにご来聴下さいまして、誠に有難うございます。心より感謝申し上げます。

今日ご出演いただくヴァイオリニストの恵藤久美子さん、チェリストの安田謙一郎さんとは5、6年程前より一緒にコンサートを行なって参りました。昨年4月に佐倉市民音楽ホールで収録したCDが、「深沢亮子と室内楽の仲間たち」と云うタイトルで秋に発売され、多くの方々に喜んで頂いております。折角の機会ですので、この素晴らしいお二方と私のリサイタルでは是非共演させていただきたいと思い、それが実現いたしました。

三重奏曲として、澁刺としたハイドンのト長調の作品と、激しさの中に哀愁と祈りを感じさせるドヴォルザークの「ドゥムキー」、そしてこの2曲の間に私の独奏で、この上なく美しいモーツァルトとシューベルトの作品を入れてプログラムを組みました。

ご来場の皆様がお楽しみ下さり、私達も豊かな時間を共有させていただければ幸いです。

2008年5月22日

深沢亮子

PROGRAMM

ハイドゥン ● ピアノ三重奏曲 第 39 番 ト長調 作品 73-2 Hob.XV-25
F.J.Haydn Klaviertrio Nr.39 G-dur Op.73-2 Hob.XV-25

Andante
Poco Adagio
Finale. Rondo all'Ongarese. Presto

モーツァルト ● ピアノ・ソナタ 第 10 番 ハ長調 K.330
W.A.Mozart Sonate für Klavier Nr.10 C-dur K.330 (300h)

Allegro moderato
Andante cantabile
Allegretto

シューベルト ● 楽興の時 作品 94 D780 より
F.Schubert Moments musicaux Op.94 D780

No.1 C-dur Moderato
No.3 f-moll Allegro Moderato
No.5 f-moll Allegro Vivace



ドヴォルザーク ● ピアノ三重奏曲 第 4 番 ホ短調 作品 90 「ドゥムキー」
A.Dvořák Klaviertrio Nr.4 e-moll Op.90 (B166) 'Dumky'

Lento maestoso
Poco Adagio
Andante
Andante moderato
Allegro
Lento maestoso

曲目解説

もも せ たかし
百瀬 喬

ハイドン●ピアノ三重奏曲 第39番 ト長調 作品73-2 Hob.XV-25

モーツァルトやベートーヴェンとともにウィーン古典派を代表する作曲家として知られるハイドン(Franz Joseph Haydn;1732-1809)を人々は“パパ・ハイドン”と親しみを込めて呼んできた。100曲を超す交響曲だとか、83曲の弦楽四重奏曲、やはり50曲以上を数えるピアノソナタなど、とりわけ器楽ジャンルに数多くを残してきた彼の作品は、モーツァルトほどに洗練された均衡性を示すわけではなく、またベートーヴェンほどの高い精神性を作品に注入することもないが、彼の音楽は常に機知に溢れ、また親しみやすい。ピアノ三重奏曲もまた50曲近くを数えることができる。

本日最初に演奏されるト長調Hob.XV-25は、ニ長調Hob.XV-24、嬰へ短調Hob.XV-26とともに、作品27として纏められ、1795年にロンドンのロングマン・アンド・ブロードリップ社から楽譜が刊行された。当地でハイドンが教えた未亡人のレベッカ・シュレーター夫人への献辞が付されており、当時6歳のこの彼女と、もし自分が独りであったなら結婚したいと思うほどに魅力的な女性であったという。

曲はヴァイオリンとチェロをとめないながらピアノが主役を演じる3楽章構成の作品。第1楽章はアンダンテの変奏形式によるト長調。第2楽章はポコ・アダージョの優美な緩徐楽章でホ長調。第3楽章は「ジプシー風ロンド」と銘打たれており、ロンド主題はジプシーの舞曲によるという。このジプシー風ロンド故に彼の数あるピアノ三重奏曲の中でももっともポピュラーな作品のひとつである。プレスト、ト長調。

モーツァルト●ピアノ・ソナタ 第10番 ハ長調 K.330(330h)

モーツァルト(Wolfgang Amadeus Mozart;1756-91)の創作年代順目録を編纂したルートヴィヒ・ケッヘルのその目録では、「トルコ行進曲付き」ソナタなどとともに、当初は、1777年から1779年にかけてのマンハイム・パリ旅行の際のパリ滞在中の作品と想定されていたこのハ長調のソナタは、「新モーツァルト全集」の校訂者であるプラートや、音楽学者のタイソンの研究結果、ウィーンに移り住ん

だ直後の1783年の創作と結論されるにいたった。「ピアノのメカニックが常に改良を加えられていた当時のことを考えれば、創作年代の5年の差は、演奏解釈上の大きな問題が提起される。ペダルが発明されたのもその頃で、例えばトルコ行進曲なども、もっと大胆にペダルが使えるのです。」とウィーンの巨匠パウル・バドゥラ＝スコダが、私に語ってくれたのが印象に残る。

ハ長調K.330は、モーツァルトのピアノソナタの中では比較的規模の小さな曲ではあるが、いかにもモーツァルトらしい明るさと愉悦感に満ちあふれた作品で、モーツァルトの研究でよく知られるアインシュタインは、その著作の中で、「すべての音の座りがよい傑作であり、かつてモーツァルトが書いた中でももっとも愛らしい作品。アンダンテ・カンタービレの影も明るくなって、雲ひとつない清澄さへと変化していく。」と説明している。

曲は3楽章構成で、第1楽章はアレグロ・モデラート、ハ長調のソナタ楽章。第2楽章はアンダンテ・カンタービレ、ハ長調だが、中間部にヘ短調の楽想を置く3部形式。第3楽章はアレグレット、ハ長調のソナタ形式によるフィナーレ。

シューベルト●楽興の時 作品94 D780より 第1曲 ハ長調、第3曲 ヘ短調、第5曲 ヘ短調

交響曲や室内楽曲、とりわけ歌曲の分野に名作を多く残し、もちろんピアノ曲にも名作が少なくないシューベルト (Franz Schubert;1797-1828) だけれど、そのピアノ曲が人々に注目され出したのは比較的近年で、没後150年の1978年頃からであった。今は多くのピアニストが取り組む最晩年のソナタなどは、生誕200年の記念の年であった1997年頃になってようやく日の目を見るほどであった。そのように不遇にあった彼のピアノ曲において例外的な存在が、今日その中から3曲が演奏される『楽興の時』や、2つの『即興曲集』である。ヨーロッパの音楽が日本に導入されて間もない頃の明治期の演奏会プログラムにも、これらの曲のいくつかは頻繁に見ることができる。

6つの小品によって構築される『楽興の時』が作曲されたのは、彼の晩年である、1823年頃から1827年にかけてだという。最晩年の1828年に楽譜が刊行されており、ピアノ曲としては、彼の生前に出版された数少ない中のひとつである。

『楽興の時』とは、この曲集の原題であるMoments musicauxの邦訳で、“音楽のひととき”といった意味合いであるが、この曲集を構築する各曲も、いずれも即興的に生まれたばかりの楽想を書き連ねたという、そんな印象が強く与えられる小品である。第1曲はモデラート、ハ長調で、3部形式を示す。第3曲はアレグロ・モデラート、ヘ短調。おそらくこのアルバムの6曲のなかではもっともポピュラーな作品であろう。スタッカートで弾むリズムに乗って右手のメロディが実に魅力的だ。第5曲はアレグロ・ヴィヴァーチェ、ヘ短調。舞曲風、または行進曲風の軽快なリズムだ。

ドヴォルザーク●ピアノ三重奏曲 第4番 ホ短調 作品90「ドゥムキー」

ドヴォルザーク (Antonin Dvořák;1841-1904) は、師のスメタナとともに近代チェコ音楽の礎を築いた作曲家として人々に親しまれている。彼が生まれた頃のボヘミアはオーストリアの属領のひとつで、政治的にも文化的にも、その統治下にあった。プラハのオルガン学校を卒業したドヴォルザークはヴィオラ奏者を務めた後に教会オルガニストとして生計をたてながら創作に励み、その頃に作曲した交響曲第3番が、ブラームスの強力な推薦を得て、オーストリア政府の国内新進芸術家への奨学金対象となり、ドヴォルザークはウィーンでも人気の音楽家に登りつめていった。また1893年にはニューヨークのナショナル音楽院の院長に就任してアメリカにも進出するのだが、ピアノ三重奏曲第4番「ドゥムカ」はその数年前、1890年11月に着手されており、翌年2月には、ほぼ完成させている。

副題の「ドゥムキー」は、スラブの哀歌ドゥムカの複数型。悲し気で緩やかな楽想と、激しく熱狂的な楽想とがコントラストを描きながら突き進んでいくというそのひとつひとつを、作品を構築する楽章と看做しているのだが、その全体を5楽章構成と看做すケースと、6楽章構成と看做すケースとが、一般的には唱えられる。4曲あるドヴォルザークのピアノ三重奏曲の中では、このジャンルの作品には例外的に、唯一ソナタ形式や変奏曲形式を持たない、意欲的でかつ斬新な構成だ。

共 演



恵藤久美子 (ヴァイオリン)

ヴァイオリンを鷺見三郎、鷺見健彰、海野義雄氏に、室内楽を黒沼俊夫、斎藤秀雄氏に師事。第41回日本音楽コンクール第2位入賞。

1972年、兄・堤剛と「二重奏の夕べ」(東京、カナダのオンタリオ)、2003年より毎年12月に深沢亮子、安田謙一郎氏と「ピアノ、ヴァイオリン、チェロの夕べ」、2004、2006、2008年、中野洋子氏と「デュオコンサート」を開催。東京フィル、新日本フィル、札幌響、山形響と協演。桐朋学園オーケストラなど、アマチュアオーケストラとの協演も多数。

1975年より10年間桐五重奏団の2ndヴァイオリン、1980年より2年間山形響の客演コンサートマスターとして活躍。現在アンサンブル・アルス・ノバコンサートマスター。桐朋学園大学講師。日本音楽舞踊会議会員。



安田謙一郎 (チェロ)

斎藤秀雄、G.カサド、P.フルニエに師事。1960年第29回毎日音楽コンクール第2位、1966年同第34回第1位大賞、海外派遣コンクールで特別表彰を受ける。第3回チャイコフスキー国際コンクール第3位。

1969年～1973年までフルニエ氏のアシスタントとしてチューリッヒの夏期講習会に同行。1974年に小澤征爾指揮サンフランシスコ響と共演。国際的なフェスティバルに参加。

1986年より安田弦楽四重奏団メンバーとして、意欲的なコンサート活動を続ける。日本現代音楽協会会員。日本音楽舞踊会議会員。